実践5　「どんなものがころがるのかな？」

概要　新しい環境になれ、園庭で探索を楽しみ始めた１歳児。見つけたもので、色水遊びや流し遊びを楽しむ中で、不思議と出合ったり、発見をしたりする姿や探究心が芽生える瞬間に保育者が注目した実践です。

ポイント　１歳児が、身の回りの環境に関わる姿に注目し、保育者が、「不思議」「発見」「探究心」を視点にもって、注視して子どもの姿を見つめ内面を見取っています。また、言葉で表現することの少ない場面でも表情や行動に心を寄せ、子どもの視点に立った関わりや環境の工夫につなげています。

社会福祉法人長尾会 第２長尾保育園　　１歳児

本園が考える「科学する心」＝「不思議・発見・探究心」について、子どもたちが、夢中になって遊ぶ姿に注目した。さらに、乳児期は、一人一人を丁寧にその個性や感性を大切に育むことを踏まえ、事例を書くにあたっては、「不思議・発見・探究心」を読み取りやすいように、子どもたちがどういうことを不思議に思ったのか、どんなことを発見したのか、どのように探究しているのか、どのように探究していたのかを見取り、できる限り文章で書くようにした。

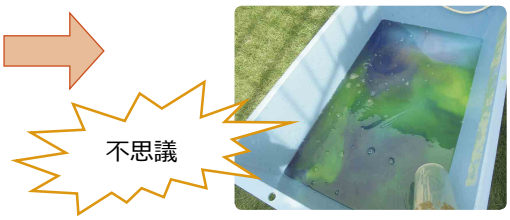
不思議
発見
探求心

場面１：あれ？ 色が変わったよ

- 進級し新しい担任とも少しずつ愛着関係が育まれてきた頃、１歳児は、園庭では様々な自然物に触れる機会や、生き物にも興味を示すようになってきていた。見つけた物を嬉しそうに保育者に見せる姿や、「これ何？」「こんなのあった！」など簡単な言葉で見つけたことを一生懸命伝える姿が見られた。また、見つけた物を自らカップ等に保管する姿が見られた。（４月下旬）
- “自分だけの”という特別感をもった探索カバン（自分でシールを貼ったもの）に喜び、見つけた草花や実を大事そうに集めている1歳児。ある日、園庭の梅の木の下で梅の実を見つけたＡさん、水の入ったペットボトルを見つけて、早速、梅の実をペットボトル口に入れようとするも入らないことに気づいた。その後、保育者が用意した用具に（まな板、包丁）興味を持ち梅の実を切り始める。
- Aさんの遊ぶ姿から次第に他の子どもたちも真似をして同じ遊びが始まった。梅の実以外にも探索して見つけた花びらを入れることが大好きになっていた。梅の実や花びらを浮かばせて「綺麗」と浮かんでいる水面をじっと観察する様子も見られた。また、色が付いたことで見立て遊びにも広がり、子ども同士でジュースとして見立てていた。色への興味が感じられたので、梅の実や花びら以外にも、保育者は色を付けられる環境を整えた。
- 食紅に興味をもった子どもが、少しずつ色の変化にも気づき始めた。保育者と一緒にペットボトルを振って、その変化を見ていた。また、その様子を見ていた子どもたちは自らペットボトルを振り色の変化を楽しんだ。また、色の付いた水をジュースに見立てて、簡単なジュース遊びや、友達や保育者にジュースを注ぐことに遊びが変化していった。(6月初旬)

場面２：「色水遊びから流し遊びへ…」

- 色水遊びを通して色の変化を楽しんだり、ジュース遊びで友達にジュースを注ぐことを楽しんだりしていた子どもたち。流す遊びにも興味を示してきたので、子どもの視点から環境を捉え、樋や透明の筒を用意した。
- 色水を樋や筒に流すことを楽しむ子ども、流れてくる色水を観察し色の変化に気づく子ども、子どもなりに“なんでだろう…”と不思議に思う姿が見られた。
- 次第に、色水を流すことを楽しむことから、タライの中で混ざり合う色の変化を楽しむようになった。子どもなりに感じたことを言葉ではまだあまり表現できないが、表情やタライの中をじっと見つめる姿、繰り返し試す姿など行動を通して不思議に思う気持ちが読み取れた。



場面３：「こんなものも流してみたい」

・遊びを繰り返し楽しんでいた子どもたち、次第に色水を流すだけでは物足りなくなった。そこでスーパーボールや草花など、色水と一緒に流すことができるような物を、子どもたちの目のつくところへと用意した。
・それに気づいた子どもたちは、次々にスーパーボールや草花を流し始めた。水と一緒に流れる面白さを感じていた。流すことを楽しむ子ども、流れてきたものを集める子どもなど一人一人遊び方は異なったが、興味を示し活動に取り組んでいた。
・Ｂさんは、身近にペットボトルのキャップがあることに気づき、流すことを楽しみ始めた。しかし、水と一緒に流すと勢いよく流れていくことに対して、キャップ単体では上手く流れていかないことを不思議に思っていた。その様子を見ていた保育者が、Ｂさんの様子を見守っていると、Ｂさんは、手でキャップを押して転がし始めた。Ｂさんの姿から周りの子どもたちも真似て、同じようにペットボトルのキャップも流すことを楽しみ始めた。子どもたちは、繰り返し遊んでいた。（６月下旬）

場面４「どんな物が転がるのかなぁ…」

・水遊びが始まり、子どもたちは、水風船や氷など夏ならではの感触にもたくさん触れて楽しんできた。以前から流したり、転がしたりして遊ぶことが好きなクラスだったので、再度、樋や筒を出しておいた。すると以前の経験を思い出した子どもが、水風船を転がし始めた。
・さらに、ペットボトルを転がす子どもなど、子どもたちなりに“転がる物”を探し始める姿が見られた。Ｃさんは、他の子どもが、水風船を転がす様子を見た後、近くにあったペットボトルを筒の中へと入れ始めた。水風船は勢いよく転がっていったにも関わらず、Ｃさんが入れたペットボトルは中々転がらないまま、ジッと見ていた。
・不思議に思ったＢさんは手を筒の中へと入れペットボトルを押し出すように転がした。
・過去の経験から子どもなりに転がる物、転がらない物を区別し身近にある物を探し始め、試行錯誤を繰り返していた。自然と自分たちで遊びを作り出す姿が見られた。

［考察］・1歳児クラスでは探究心が1番多く見られた。その要因として考えられたのは保育者が、子どもの見取りに添って環境を構成したことがあげられる。また、遊びの中に一緒に参加し、夢中になって遊びを繰り返す子どもたちと一緒に発見したり、考えたり、子どもたちの「もっとこうしてみたい！」という探究心が深まるように、側で受け止める言葉掛けを行ったことが考えられる。今後も、子どもたちの不思議・発見・探究心を大切にしながら遊びにトキメキが感じられるような魅力的な環境を保障していきたいと思う。
・場面４のように、自分たちで遊びをつくり出すことで、「ああしたらどうなるかな？」、「こうしたらどうなるかな？」という探究心が芽生え、子どもたち同士で試行錯誤しながら遊ぶ姿につながることが分かった。自ら“遊びをつくり出す”楽しさを子どもたちと共有していきたい。
☆保育者が夢中になる瞬間：ペットボトルに張った水の中に花びらや梅の実を入れ、ジュースとして見立てて遊びが広がり、さらに保育者も一緒になって探索することを楽しみ、浮かぶ花びらや梅の実、色の変化を一緒になって楽しめた時。子どもたちと簡単なジュース屋さんごっこを楽しんでいる時。筒の中に転がる物を子どもたちと一緒に探している時。身近にある物で転がる物転がらない物を見つけ一緒になって探究している時。保育者も子ども時代に戻ったような瞬間の感覚（夢中）を味わっている。子どもも保育者も夢中になる体験が「科学する心」を育てることにつながる。